

大東香譜

其他種

特別

イ 4

3159

B 36

9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160

14
3159
B36

香石硯筆墨紙陶鑲
物器

名物切
刀劍
鐔



大唐香譜

專齋 藤野昌章輯

光遠木

靈元帝勅銘

新勅撰

御製

西三條左大臣
とあり可考

と一經くわら古き浮木とすくぬりてさへけ
さひのり遠くさくゆに

右 有馬玄蕃頭家木

瑞香木

後水尾院勅銘

古き和梅檀 法隆寺代りに焼く
上加茂社家岡本氏家木

露乃上

檀の心と云ふ 出所未詳

萩乃露

糸櫻の古木と云ふ 西三條家より

出づ 公福卿銘

夕端山

或、木綿山と云ふ

古き和梅檀 色黒味苦

萬代

此事可考 此時未聞有 御銘香木傳

世 皆元和已来有り 後柏原院勅

銘播州多河より有

固抵云 香木傳世者元和已来有りと

は此更不審 佐々木道譽持香に和香

數品あり 入道の和香木の銘を用ひ和

香木を去り 東山殿御先代より無銘

の御香(和香)の銘を用ひ撰集に加入
したる銘多し 後柏原院(大永六
年崩御)の天子也 可考

片ソギ 一名 遠赤

小堀遠州天王寺造營の時出たる鳥居
の木と云ふ 又佐吉の社カツラ木の古
木と云ふ

露見嶽

梅檀 豊後小浦平家山麓より出

づとらふ

八重雲

碓 碓國立れ木 香より出所未詳

木曾棧

檜

長柄橋柱

老木の柳

奥州平泉寺中尊佛之木と云ふ

筆折

柳の古木

石州津和野人丸寺の中に入り

巖島鳥居

法華山

桂の古木 枝葉無一 香佳一 出所不知

筈木

三保崎

駿州三穂の松原より出楠の古木あり

夕日浦

對州より出づ 神代の本より出 雨森
芳洲橋窓茶話云 對州海邊有鴻

荒の時に生樟木或榮乎

按 臺岐對馬者 吾邦之瓊崖也者

香木若理當然也

鎌倉

△口ノ木

相摸

平岡

同

河内

廣峰

イフキ

播磨

葛城

イフキ

八橋

栗

三河八橋の朽木

近江栗

樓閣櫻

禁裏南殿の御廊下の下よりあり
櫻の古木なり

太山木

或ハ霧ヶ谷と云ふ 京東山高臺寺
ハ櫻の古木と云ふ

西行櫻

京西山或嵯峨法輪寺

梢の外

天王寺樂人林氏庭あり梅の古木
難波の梅

攝州尾崎難波村あり

まじ松山

梅樹の根あり

安樂寺

太宰府飛梅の古木

認事梅

上如茂新あり

神護寺

梅の古木 山城高雄

軒端梅

京相國寺中林光院あり

故郷の梅

和州初津古賀之の梅

瀬戸

白檀 相州鎌倉

法隆寺

同 初別法隆寺 中の木

誰が袖

同 泉州埜天神社 内

須磨寺

攝州須磨 上野福祥寺 本尊の餘木

とふ

清涼寺

梅檀 嵯峨釋迦寺 本尊餘木

香の森

若林の海邊 別其地名あり

赤間關

梅檀 長州 木多々あり

夏衣

勅銘

同 赤 攝州有馬 より出づ或は三田
位一水所持と云ふ

額

或關

かくの板と云ふ 同赤上品の木なり
出所未詳

伊勢浦

梅檀 伊勢山田より出づ津の海邊

くりりご

芳野木 上品 杉

一名比蘇寺 和州芳野比蘇寺より

鳳來寺 杉

三河孝女薬師尊像の木

小手巻 杉

新代の杉とり子 大和三輪社

二本杉

和州初瀬 古川路邊

三上山 杉

古木 近江三上山の鳥居

蛇姥杉

奥州中尊寺光孝の後より

千枝の杉

外宮より 比八百餘年

伊勢の神杉

千歳杉

元和の頃京へ奉るとりて又^三羽州平泉へ
とあつる

布留神杉

石上の神木 一乘院宮よりあり

村立杉

外宮 山田よりあつる

三室神杉

聖護院宮よりあり

埋杉

相州箱根山

同

山城北山氷室の木

瀬戸

鎌倉瀬戸明神社内の杉

阿蘇杉

根園二十六田十六瀬株の空所一間
半四方あり 肥後阿蘇山より二千

餘摩の古木

大江山杉

三熊野

御銘上之杉 後三熊野

六百身程の古木 紀州新宮より

室生山

和州

萬年杉

靈元帝勅銘

杉

出所不知

太子杉

京智恩院境内

雷光木

京平野社前

妙遍杉

高野山大塔傍よりあり今古株而已

曾根松

高砂松

杉

唐崎松
天橋立松
大淀松

和歌浦

又同海邊の古松 片男波とらふあ
了和歌浦伽羅山より出づ

衣掛

甲州身延山

一夜松

京北野杉梅院より

唐船

靈立木

鳥居家の木

名取川

奥州

阿武隈川

奥州

橋姫

柏木の根あり 香佳し 山城宇治より
出づる

建仁寺

或ハ賤ヶ屋とりし 三度の火より残り
し木なり 建仁寺の門柱 今の鐘
の檜木とす

千年家梁

玉くしの葉

櫻所院勅銘

愛宕山本社の柱肉桂ありと云ふ
造改の古木を竈下より焼く 靈香ある
故其木を院 御所へ上りしと云ふ

筑紫箏

楠なり 唐舟の破れし板より箏を
作りし其木と云ふ 二條殿より

鱈振山

落山天皇樓 鱈の領巾と云ふ

京吉田社より出づ

不狩

蝦夷杉前の間より出つる樟木とて
香佳し 不狩とは地名あり 杉前
若狹守より出る

木香

沉水 味ある古木なり 土佐畑
より出る

圓柏

聖一國師將來の木なり 京東福寺の

あり

井出山吹

山城國玉水よりあり古木あり

曲折板

按板或は坂歟

近江國志賀山中よりあり 志賀宮殘
木とす

若草櫻

櫻木香佳し 東大寺よりあり 聖武
帝の頃の木

大田櫻

杉前より六十里程奥蝦夷一山塔様あり其井より古き樺あり

捨山舟

船板より角ひし梅檀の古木なり住吉より出づ

上浣木

神の根 出雲大社

檜垣

京

求潮持木

山城國寶嚴院庭より何里

會香木

信州高井邊

鹿喚埋木

江州栗本郡

魚のハネ木

古きマナハンの様なりとて南都

にて海邊より魚のハネあがたる古木
すりといふ 天童按、マナシは真魚箸炊、
又南都といは奈良なりしが奈良
の海邊不審

右中点セ者二十六種は好品なり、其
餘は名所の木としるまでして香氣を
し、和香木と云ふべし、二十六種の
中、好悪あり、下の鱗形(△)は杉の
印なり、天童謂、点セ者と断りありて点見
えざ、不審、又鱗形は其郷産杉と
断りあれば附すべし及ばざるべし

追加

玉兔

尾州名古屋の天守御銘

胞衣の浦

紀州和歌山の近濱胞衣浦より出る
往昔神功皇后三韓御征伐の半途より
應神天皇御降誕あり其砌御胞衣を
納免奉る地にて證よ白栴の木を植
置き給ふ其古木なり今此木を御正

體として社を建 胞衣浦より奉_レ宗正
八幡宮 右故此和木新大の付穢大の
人炷相聞候事堅く忌也

金井欄

濃州笠松の郷士廣瀬好之の庭内井
筒の古木なり春薄宿年彼地へ遊行
して廣瀬氏の宿り此木を得て則花山
院家より奉乞御銘一和香木とす花山
院前中納言藤原愛徳卿御銘古詩井

の意として御付被為左則清染筆別記
相添也

于丙安永七年亥八月日御沙汰

右三種天明元年六月師家より到來

六十一種名香
右別卷に字爰に除く

古代名香 七十七種

中香以来名香 七十九種

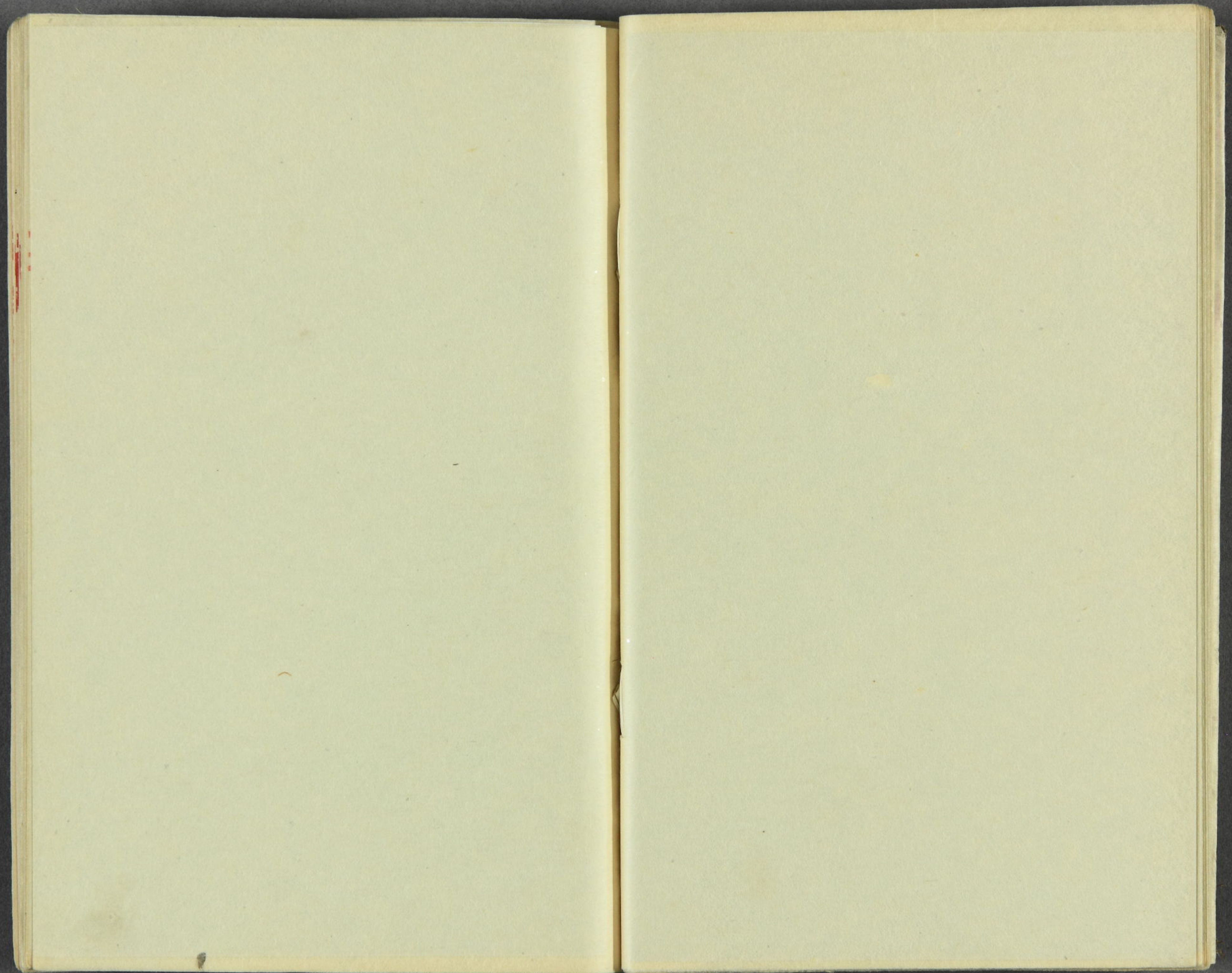
五百六十三種

畧大

都分名香七百八十種 和香木百四種

天保三年壬辰申冬上浣日信之若也 白陽亭在判

紀州徳川英大奥より傳書之 梨心紅



述石

漆山天童編

○盆山之石

萬宝全書、和漢諸道具類部ニ曰ク

一 盆山の石ハ横六寸

高サ厚ミハ見合

一 川石のすはりのより手いらずを用ゆ、

石ふるまきがかり

一 谷川の石上石なり 名石の分ハ谷川の

石なり 山石海石は景善くても悪く

○盆石產地

紀伊國名所圖會後編卷六三曰ク
産物盆石。瓜溪より産す。漫りに採る
事を免す。本國盆石を考ふる所は、
此の谷と牟婁郡古屋谷と二所に於て
古屋谷の方せし名高く洩るる水は此溪
の石も或は古屋谷の産とす。然れ
ども石質品位少く異なり。古屋谷の方

い山峰尖りて黒色多く、此谷の如く
なごらかりて青色のもの多し。然
水とも共に奇態萬状ありて好まの把
玩と充ては一なり

○盆石

雲根志前編卷五三曰ク

古代は盆石を甚く秘藏する事也、中古
度は用ひたりて近來好まの士や、
古硯を唱ふる者あり、其の書院床飾

りは必ず金石を用ゆと云 予が茶道の
師京都野中道玄先生の記に 四方の石を
けりしるる中 産石の産地は 産石を
ぞるべしと 砂の打やうに 七産あり
と、石もす法定あり 峰の雪の景色あ
りて 谷滝洞禁崖等自然と ころひころ
を上品とす、江州坂本 来迎寺は 九山
八海石と云石あり、是等と尋常の産
山より大なり、又京の西山 粟生光明寺

ひがし、びが
心シノマリアナ

と云寺の産物、万里江山と号する産山
あり、其かちち大山の如く甚く佳石な
り、讚の山は富士、江を松島をつしえ
の筆がらるるに石をえぬらん。其外處
に田舎でも古き家はまけのやあり
或は貴人又は名人の銘がとあり、古田
徳部重徳の記を見よ、産石饒のり
知る人かたし、東山殿中歌、産石の
前には一ツ産ひがし後と遠き後ひがし

らぬ、此歌の心より、益石が、しりの趣き
よく聞いたりも。

益石出づる地定まる所あり、只後川の
て稀く拾ひ得る物とし、しかし揚州有馬
鼓ら滝近辺の川原・江州越智川原・駿
河沖津の宿近所・上野栗橋五料・伊豫
大洲・美濃國赤坂山等より多く出づ、
赤坂より益石谷と云あり、此所の山土中
三五尺下より堀出すをてより、自然と

して大山の景色備はり峰、雲の躰、洞
・谷・禁・滝共、具りしものあり
唐土にも益山石あるより、宿書りて
と云こ

○益山石夢の浮橋と九山八海石。共、東山殿八石の内の
ニツケり尾州家も傳ふ。夢の浮橋は元來後醍醐天
皇の御物。九山八海石其の形よりして名付たりか
○紫野大徳寺(塔中大堂あり)發聲と云ふ益石
あり頼朝の妻政子所持のものなり、甚大にして
四人より昇きおつるものなり

○諸隨筆に記載せる石索引

江戸金石雜誌内(一話四二、一九)

雲根志抄(一話一四、三)

諸國ノ奇石(笈埃三ノ一〇、二九)

山牡蠣、耐、蛻、駒形、團子、

木葉、魚、蜘蛛、燒米、軟、

人肌、鼠殺、鏡、花紋石、龍

骨石、石に花咲く、天養葉(印花三、三九)

米、餅、土饅頭(甲子四六、一八三)

食用なる石、庖丁石、無帽石、物の附

著す石 (甲子三三ノ四八七)

粟の出る石 (膳餘四ノ一四)

乞子石、呪病石不可踏、摩沙石 (梅日三ノ三六)

奇石 (統昆三八) 麻布、異石 (鬼小下ノ六八)

伊勢國ノ奇石多き地 (笈埃五ノ九)

品川ノ鳥石、又、鷹石、圖説 (甲子統一ノ九)

日月の象ある石 (道徳一〇ノ八五)

泗濱石 (塩尻四六ノ七四)

下総三石村の石の不思議 (道徳九ノ八一、鬼小

中ノ二〇二)

周防仁保村の怪石 (枝瘡二ノ三六)

出羽横川より出て、奇石と其歌 (落粟後ノ五〇)

天然の奇石 (塩尻四ノ七一七)

天然、又日晷と云ふ奇石 (九桂七ノ一四四)

肥前平野の石 (甲子六ノ六一)

姫路侯の五福石 (一話一七ノ三)

武州金鑽村神社の鏡石 (甲子四六ノ一八一)

石上生花 (枝瘡二ノ二七)

石言 (況齋二ノ七五)

子を養む石 (甲子三二ノ四七〇) (塩尻三七ノ六〇)

(二) (茶筆一ノ三四)

三貫目より九貫目へ増量せる石 (蕨三ノ三〇五)

〇五)

人の礼拝せる麻布の五石 (海録三ノ三七三)

根ある石は祈願 (道鏡一ノ八五)

本込矢来下の怪石 (志水上一ノ四五三)

石割れて剣出つ (諸家一〇三)

日本第一の大石 (間諫三ノ二〇)

石村 (茶筆二ノ六)

魚石 (杉筆五〇ノ六)

鏡石 (扇龍三四)

鴨川石 (笈埃八ノ一三)

熊野石 (輜軒一九) 鰻頭石 (ク)

茶磨石 (雲錦三ノ一九)

石に文字と書きて中の透る法 (甲子四六ノ八一)

女の臍より出て石の祀 (杉筆七ノ七)

夢中授かりし霊石 (宮川五ノ一五)

石を好める徳士の友 (四方、月ノ一九)

致忠買石 (昆陽八)

大石を取片付けし頓才 (一治八ノ二二)

~~邪ヲヨリシ大石を兩除く考案 (甲子三ノ四七)~~

~~穿穴埋石 (和漢同書 (況齋三ノ一〇六))~~

石の歌 (甲子續七二、五五八)

隕石・津軽石・鐵炮石・毒吸石・ナンダモン

ダ・水浸石 別記

石の成生の理 (草廬二ノ三六四)

石中の蟲 (寓意下ノ一二六)

湖水を清水とする石、中より生ずる魚の居る

石 (寓意上ノ七八)

石の字の現れしる石 (寓意上ノ八〇)

山石・水石 (兼穂一ノ下ノ七四八)

奇石蒐集の流行、蒐集家、夜光玉、

水晶中より魚の遊行せらる石、軽重ある石

等 (北蹟後ノ三ノ二七)

石を蒐り集むる江州人 (譚海七ノ二七)

諸州の名石 (雜説上ノ七一八)

青山家珍腕の小餘綾石と新井白石の記

文 (寒磔六ノ八七)

流波門の鮎石 (江産二ノ一五八)

近江國石橋の水口 (里人二ノ七九二)

阿倍川の馬蹄石。末の杉山とありある石。二足

連の馬の形したる石。鶴の二羽下り居る

形の石 (幸庵三〇〇)

市ヶ谷門の烏帽子石 (江産二ノ一五八)

越前の石は皆丸 (嘉長三ノ二二〇)

越中玄山の姥石 (里人二ノ七九二)

奥州の硯石 (高意上ノ七二二)

大坂城内の三合石。武州玉川の菊紋石

潭海二ノ四六)

大坂吉祥寺の朝鮮石 (浪百七ノ六〇六)

鏡石 (遠碧上ノ二七二)

新井戸天神境内鮎石の不思議 (江産二ノ一五九)

紀州那智山の隠水石 (里人二七九二)
建仁寺の妙徳石 (嘉良四ノ三七二)
讚岐沖の系女郎 (田舎女郎 (里人一七六六))
摂州大丸村の釣鐘石 (里人二七七八七)
摂州林寺村の蛙石 (里人二七七八七)
淡井抄平美濃守邸内水分石 (江産二ノ一五九)
但馬城崎豊岡島の石の形 (禪海四ノ二二八)
南部焼山の栢葉石 (里人二ノ七九〇)
日光中禪寺の坐石・牛石 (里人二七七八八)

はまくり石 (遠碧上ノ一ノ三七七)
備中大島の紋石と貝石 (禪海八ノ二四三)
平川門外水の字石の不思議 (江産二ノ一五八)
三保杉原一文字石 (醜奇三五五)
三保杉原小対形石 (河内勝馬山の
かざり石 (禪海一ノ一))
山崎白川の生石、下賀茂の石 (禪海二ノ三六)
石妖 (中陵一三ノ二八六)
人造石・玉石

翠嶺が富士川と拾ひたる陽石(耽奇四〇七)

都女(松屋筆記二四六九)

異石論(格古要論卷七、十二丁)

怪石辨(鐵網珊瑚卷十六、十三丁)

九色石(三國志魏書東夷傳)

墨石ゆらぎ 倭列聚中編

化石溪(北越雪譜二、中)

含水石(養花日涉一二、三)

凝水石(和三國六一、三〇)

石燕(談薈二五、二七) (和三國六六七)

毒石(和三國六五、八)

陰石(甲子夜話二、三三七) (太平御覽二六、五二二)

及陽石

女陰石(煙霞綺談二、五)

夫婦石(龜前國統内上記百) (紀名因五、二二)

和漢の名石(和三國五九、二) (事安名因二、二六)

怪石(あすみのり 四五三) (技癢錄二九)

二里餘の大石(筑後志七、三七五)

羽州米沢
山石

蜻蛉石 (都名所圖会四三四)

魚石 (新語園六六六)

木賊石 (北越奇談三三)

青石 (類聚名物考六、一〇六二)

甲子瀛石 (和三四六六七)

盆石 (盆石口傳書) (室羽二重三ノ上、三)

盆石の歌 (年山紀聞五、二八)

盆石の祀 (藝文後編ノ中五)

水戸領
村松山日高
寺ノ山石
到吉社藏院床下

○硯

硯は漢以前の制か (塩尻九九ノ七一〇)

硯の産地 (東屋上ノ四)

昔尾張り硯を出土 (塩尻二三ノ三七九)

京師硯匠名石目録 (一、祐典、其五)

後水尾院江州水原寺に御寄附の硯の御祀

及序歌 (塩尻七八ノ四六八) (一、祐一、二)

櫻川石の硯 (松茸六一ノ一三、八六ノ二三)

焼失せる端溪硯 (甲子六八ノ四八)

(凡ノ中
五七二)

澄泥硯并圖(第卷上ノ三六)(榎林同款難
(高收上ノ四五))

硯の蓋の銘(一治四ノ一三)(榎林上ノ一八)

片岡元周が硯の交(一治三三)

寛文帝御製鳳足硯(年打上ノ一六)

鳳足硯の銘并序(年打上ノ一五)

松浦家の木硯(甲子統一九ノ三七)

壬生忠孝硯(海録一八ノ五〇七)

途川寺一星硯(甲子五〇ノ五五一)

池 慈地藏端溪硯の圖(一治二九ノ三〇)

硯上りのある硯(四万堂ノ一五)

朱硯と白石を用ゐる交(海録一九ノ五四六)

(三卷上ノ二三)

唐以前硯朱硯(海録一九ノ五二六)

硯の神(榎林漫録上)

硯 瓦 木 竹 船来の澄泥研

硯頭 杉蔭硯 硯の銘 名硯 硯の良

品 硯面に物かゝるを忌む 硯面の磨を次

かぬり 古は硯を左より量りて一斗 (天墨)

五ノ九四

硯の良品 硯石の産地 古瓦の硯材 名

物古硯の因 硯の保存法 支那より日本

の硯を賣美す (雅道一ノ二五三)

硯の品評 端溪 若州鳳尾 城州嵯峨

月輪 阿州梅林 肥後白瑪瑙 唐州青

浪軒 奥州正法寺石 長州赤間 江州

高島 甲州雨畑石 (寒樂三ノ二六)

歙州硯 打本圖説 (硯奇四六四)

瓦硯。澄泥硯 (好小下ノ六二八)

古瓦硯 (梅村人ノ五六)

古石硯 及石材、土佐石王寺 甲州雨畑

の硯材 瓦硯材 (好小下ノ六二九)

古磁研圖 東大寺所傳古研圖 澄泥研圖

古瓦研圖 紫石研圖 紫石乾乾研圖

(好小附六三ノ六四四)

咸陽宮の瓦・銅雀臺の瓦 (遠環下ノ三ノ四九一)

歎瓦研 澄泥研 銅雀研辨 (竊考一四七一)

兩畑石の流行 (近風一六ノ五八二)

駿州阿部川より出づる研石 (幸苑三〇〇)

土佐石 若狹石 紫石 馬蹄石 (遠碧下)

三四九一、四九二)

屋久島石は研材の第一、研石の上品下品

(北瑛後ノ四ノ二)

支那の硯は眼ノ赤眼・活眼・流眼等にも重

きを置き、日本硯は眼無 (北瑛後ノ四ノ三)

朱硯は良材 (譚海一三ノ四一〇)

硯は日と洗つて用ゆ (譚海一三ノ四一〇)

硯の洗ひ方、墨に應ずる硯、硯より格を添ふ (獨癖四〇)

硯を洗ふ (獨癖四〇)

硯を洗ふよりき物 (譚海一三ノ四二八)

硯を洗ふより蓮の葉の技殺し (酣中上)

三九八、下ノ四〇四)

硯を左より買ふは古風 (愚雜一ノ五八)

御前より買ふ所硯を左より買ふ (保敬一七二)

硯の水は我影うつるなりと云ふ也 (夏山五八六)
硯は物かきぬる予 (重魚二三四三) (夏山一〇一〇)

(後松一〇四三)
硯は物書きのなりと云ふし (翁草一七五、五五七)

叙位叙目の時の大硯 (嘉良一〇四七)

新作の硯は試筆 (梅窓上、五一二)

名物千年硯入札代金 (月堂七、三七八)

江戸城中教宗物なり (瑞溪研 (冥翫六、一二三))

徽宗皇帝御物布袋硯 (遠碧下、二四九七)

京都知恩院宝物松蔭硯圖説 (翁草四八、五九四)

平重衡の松蔭硯の真偽を就て知恩院と

思谷深空寺の硯松根舎重宗の裁決

(翁草七四、一四五)

兼好法師遺愛の硯圖 (玉石下、一八六)

弘法大師大般若經書寫の硯圖説 (耽奇二七四)

清和天皇御所持硯 (松竹一〇三四)

律律寺澤硯圖 (耽奇四二〇)

唐山磨書硯圖 (耽奇一〇四)

對馬海濱より得たる天然硯圖説(歌奇五七)
東大寺古陶猿頭硯(好小下ノ六二八)
鳴戸硯圖及銘(歌奇六六)
物茂卿遺藏志間硯圖(歌奇二八四)
法皇御好ニ重底硯(嘉長三ノ二五二)
壬生忠岑研及西寺硯(寂菴四八ノ五九五)
劉基ノ硯(柳菴利ノ四九三)
龍鱗月の硯、龍尾研(柳菴利ノ四八七)
古唐硯蓋の銘(遠碧下ノ三ノ四九三)

重

後西院の勅より光圀の書きし硯銘、女房
一奉書、勅筆御製筆序(風ノ中ノ五七三)
後水尾帝外家(玉栴より小硯を下ノ賜は
りし御製)(風ノ上ノ五三四)
後水尾帝より永原寺一縁和尙に賜りし
硯の和歌及序(風ノ中ノ五七二)
徳川光圀の鳳足硯銘筆序及寛文帝
御製(年紀三ノ四)
中院通友の硯の銘の文と歌(異従四ノ三六)

水の出つる硯 (奇異雜談卷五)

硯より小野つら (譚海一三四二八)

硯より龍のなる (枕草子三三) (唐筆似硯并硯編)

硯・硯各式・硯製造 (文藝類攷卷八)

硯 (大日本美術史六五)

硯 (多邊遺傳下)

硯 (米後墨硯統三)

硯有數種 (吾國硯考下)

猿頭硯・鐵硯・温硯 (少々)

硯 (宛委餘編一百七十卷、十七丁ウ二十三丁才二卷)
(五雜俎十卷、五ウ)

古硯論 (格古要論卷七)

古硯辨 (鐵網珊瑚卷十六)

硯屏辨 (少々五丁ウ)

古硯攷 (文房肆考卷二)

評硯・洗硯 (居家必用卷十、五十八丁)

一奇硯 (和蘭圖七七八)

硯墨筆紙 (萬室鄙事記卷二)

硯

和漢研譜

古名物類聚五

和名抄三 夜路庭訓抄四 門室有儀抄八

清見下庭抄一 河海抄七 源氏本一七

東雅言 和名牙回会一五 歌紙下百後一

天朝墨詠五 萬葉部子紀二 言元柳八

口名世紀通証二七 楊氏漢語抄三

事文類聚別集 車林店記以集

書之改夕一二 岡德藪函三一。二〇四

太平御覽六〇五

〇瓦硯

瓦と硯瓦

(梅林上ノ一八)

古瓦の硯

(続昆一〇八)

銅雀瓦の瓦

(九桂六ノ一二〇)

新瓦の特徴

(梅村人ノ五六)

多賀城の瓦を硯材

(文會三ノ下ノ六七五)

瓦硯の圖

(多喜十能女房一) (梅村小孫附録)

○筆

鼠鬚筆・狸毛筆、筆の保存法（九桂六）

（二九）

狼尾筆（海録一五、四一） 朝鮮産

筆又兔毛を用ふ（理林六、一六）

筆を結束するに漆を用ふ（海録五、五三）

筆を長く用ふ（花月二）

筆のやうに軸を三寸下てかく（杉筆九、一五）

水筆（護小五、九）

筆

筆

夏毛の筆 (抄筆九〇ノ三二)

木筆 (姦遊三ノ五)

能書不揮筆といふ誤 (況舟一ノ四)

古筆蝨と云ふといふ説 (姦遊附四) (鄰女

二ノ四二)

曲亭瘞筆の銘 (烹菴前上ノ二)

筆師。浦辺の筆抄附少法師 (柳記下ノ二)

天下一の筆抄 (柳記下ノ一二)

福の字子稱する筆師 (塩尻三二ノ五三九)

筆師が少法師某と名乗る事 (姦遊附九)

筆塚 (抄筆六七ノ七)

筆の管の吉凶 (抄筆九三ノ一六)

良筆、良筆の選擇、卯毛の筆、筆の毛、

道風好の筆、筆材料、筆の柄 (天皇

筆と聿、不律、弗といふ (南柯二ノ一三六)

蒙恬始て筆を作りしといふ誤、其以前

よりあり (過庭二ノ二七)

延暦大同の統紫製の筆世に常用せら
れしり(良山二ノ三六)

京都・若狹製の筆、江戸大店の筆(禪
海一三ノ四二七、四二八)

京都製の筆の勝れるあり(禪海三ノ九五)

筆の毛先よ揃へる法(中陵二ノ二五三)

夏毛と冬毛(関秘一ノ四一〇)

上杉筆(江歴四ノ一六六)

正倉院御物の筆の管と蓋(宣筆六ノ二〇九)

藁筆の造り方と始(文会テ下ノ六三七)

支那筆の品評。印康侯・廣文竹絲・陸申

權・吳封采の製、琉球の蔣瑞元・陳大

典の製(宣筆三ノ二二)

支那筆の價、能くお持者としり(碎論)

(リ五ノ四六)

筆を多く備ふるの辨(リ五ノ四六)

筆は良品と選ぶべし、筆の保存法、

筆の管(雅遊一ノ二五二)

筆の貯藏法（豫後一三〇四の九）
五百年前の筆（橋原上ノ三四九）
筆師管城子宗元（異説三ノ二四）
古法師萬木軒・野好孝・文魁事・
法古秋・秋後の霞雅也（~~筆~~三三四）
大坂筆匠新光園保佐（浪百六五九二）
筆は夜叉も持てせよと把筆如社士とい
ふ徳（若治上ノ三〇）

筆床たて・筆架（雅遊二ノ二六二）
石子刻して筆架とする（中陵一四ノ二九三）
收筆法（吾園隨筆才、三三二）
筆・筆製造法（文藝類纂七）
筆・筆有數種（吾園隨筆才）
筆（宛委餘編一百七十七卷、十六丁一十七丁）（五雜俎
十二卷、一丁）
評筆・收筆・洗筆・筆卦・筆對（格古

要論 (文房論卷九)

筆格辨 (鐵網冊湖卷十六、六丁口)

筆說 (膠筆頭耐久不落法、洗筆、藏筆)

(文房肆攷卷三、二十三丁口)

評筆、收筆、洗筆 (居家必用卷十六丁口)

○墨

日本墨の始

(塩尻四一、六六八)

杉煙墨の始

(昆陽七六)

丸墨、油煙墨

(杉葦一二七、六五)

墨の優劣

(海録六、一七〇)

硯の墨色

(白紳三、九)

貴中、墨

(海録一九、五四四)

江州武佐墨

(夕五、一四〇)

紀州後代墨

(橋憲二、二〇二)

一

墨

石花墨の製法 (海録一、五二七)
 朝鮮の墨 (桂井上、八) (海録一、五二二)
 試墨法 (喪志二二)
 墨の用法 (閑室一、三二二)
 墨の良くうづる法 (海録三、三六三)
 墨用漆者 (ウ一七、四七四)
 洗字の薬 (喪志二二)
 墨痕の消失する法 (甲子四六、一八二)
 墨の油煙ととる薬 (甲子統五六、二九八)

朱以起経、墨以起傳 (況齋一、三六、二一〇)
 古梅園墨譜 (梅日五、二〇)
 頼朝公の残墨 (桂井上、九)
 程君房の墨 (九桂六、二二〇)
 李の家里墨模 (梅日五、三五)
 墨に用ふる水 (一話三、六)
 墨に用ふる水の良否と筆勢 (落景前、四九四)
 古墨 (吾国随筆中)
 墨工姓名 (米庵墨談二)

墨の名、後代墨・淡路墨、墨をすした味
立つ時耳の垢と入る、墨は杉煙を作る、
古墨、墨柄、墨のすり方、墨のツヤ、
黒石と黒土（天墨五ノ九〇）
又ミの訓（錦所二ノ八三）
墨の良品、奈良良墨、支那墨の良品、墨の
用ひ方、墨の水、墨のすり方（独秘四〇）
墨の良品、墨の保存法、好んで墨を弄玩
す（雅齋一ノ二五八）

墨の鑑別法（三曉下ノ一六一）

延暦大同の頃の御製製墨書用せしむるか
（良山二ノ三六）

奈良良製墨の始（嘉良二ノ二〇一）

墨の製法（禪海一三ノ四一〇）（中陰下ノ一六五）

墨の原料（油煙と膠）（茗話上ノ八）

杉煙の墨良し、近年の墨背唐紙を合せず、
大字を書くに用ふる墨、牧養の墨（独
秘三五）

墨のすり方(嘉良三、二五九)(関秘七、五二二)
墨をすりたる力をいふ(祝)(玲瓏三、六五九)
墨は鐵魁をすりたる及、唐墨如病夫と(子

諺)(茗詒上、二〇)

夏日硯の墨をすりたためて置く(譚函一三、四三)

日本製支那製の墨品質比較、墨の膠氣、墨
の香、支那墨の價、詹素亭墨品記(良山

二、三七)

和墨の品評(古梅園、高木紹安製品(百集
三、二六)

唐墨の品評(方于魯・程君房・孫元亮・

吳中伯・程君耀・羅小華・詹成奎の製

品(百集三、二四)

逍遥園の墨(リニ、一〇〇)

古墨圖(好小附、六四六)

古墨(多代墨、武佐墨、興福寺の墨模

)(好古小下、六三〇)

弘法大師入唐將來書家煙墨圖(耽奇四、一五)

天平中の韓墨、及多代墨圖(玉石四、一四七)

正倉院宝物墨の取(有難六、一〇八)

徂徠手澤華墨圖(枕書四一九)

大段に於ける松井古梅墨舖(浪百四、五

四四)

かが茅より墨の食合せ中毒の治(禪海八、二

四五)

墨(鳥迹禪下)

墨・墨製造法(文藝類纂八)

墨(大月本美術史六五)

墨(空委餘編一百七十卷、十七丁)(五雜俎十三卷、

九ウ)

評墨・各所墨(格古要論、文房論卷九、七丁)

墨説・用墨訣・藏墨法(文房肆政卷三、二

十六丁)

評墨・李庭柱造墨正法取煙(唐家文用

卷十、六十一丁)合膠・搜煙(クク、六十二丁)

藏墨法(クク、六十六丁)

○紙

紙 (如蘭二ノ一八)

紙の出来さる以前、我邦製紙の始、漉返し

の始 (千清一八二)

我玉紙の始 (安随二ノ一八)

かんや (紙を造) 紙の子 (屠龍五四)

復古を紙と漉す經子書く (杉本九ノ二)

取替紙の始 (親子一ノ三八)

唐世尚我邦の方 (随意五ノ三五)

氏

唐玄宗日本の紙を用ひし事(塩尻六五ノ二四二)
支那の製紙(護小四ノ三八)
日本とて唐紙の産出(笈埃八ノ七)
光圀公透切ある紙を核す(甲子一六三〇九)
三井親和端紙をつき金を用ひし事(クク)
紙一帖と一かきぬと(杉草九二ノ三六)
紙の大小をバシと(丸桂六ノ二二五)
紙を古く見する法(理糸一ノ七)
染紙の法(統昆一〇)

紙の縮痕を去る法(喪志一ノ二)
紙の材料種々(塩尻九二ノ六三四)
日本を製する紙の名(一話三九ノ八)
薄兒紙(安随一九白)
薄墨紙(安随二〇ノ三二)(杉草九二ノ二四)
薄様帖紙、懐紙、檀紙、高檀紙(孝経四ノ七)
うららもり紙(安随二一ノ一〇)
鶉紙(クニノ三〇)
押紙(ク一ノ一五)(安夜一ノ七)

押紙と楓紙 (安随百ノ四)

大洲毒の木葉を液入れの紙 (甲子二三ノ三七)

大高檀紙と引合 (白筆上ノ四八)

紙屋紙 (銀屑三三) (安随三三三) (松筆九一ノ三四)

雁皮 (松筆五ノ六)

小菊といふ紙 (甲子四〇ノ七九)

五色の唐紙、朝鮮紙 (塩尻一八ノ三九二)

紺紙、砂子紙 (桂林下ノ七)

砂紙 (統比六〇)

宿紙 (松筆九一ノ二四)

宿紙・熟紙・液返し (卯花三ノ三七〇)

杉原紙 (玉か八ノ三七) (猿杵附ノ三) (薙月四ノ三六)

大唐紙の價 (半日一ノ一六)

唐紙 (安随四ノ二) (一宵下九)

玉川唐紙の製造上覽 (甲子統九五ノ三五、四元)

檀紙と引合及陸奥紙 (白筆上ノ五九) (白紳

八ノ五) (安随一八ノ四三)

檀紙と高檀紙とは別あり (玉か一二ノ一〇)

檀紙・陸奥紙・多由子の紙(卯花一三二〇)
 抱朴子と見ゆる紙・蔡倫紙(況舟一三三)
 風多危地・蠟紙(梅日四ノ二八)
 毛邊紙・確紙・蘭紙(塩尻四七ノ七五六)
 松皮紙(昌陽七)
 美濃紙(松茸三ノ一八)
 陸奥紙(安随一九ノ四) (松茸一〇五ノ四四)
 琉球國の真眼(塩尻五五ノ八〇)
 落紙(一話一四ノ四四)

紙はカワミナリ(関秘七、五一七)
 カミの名、生紙・套の紙・日本の紙は萬
 國に勝る・上等の紙・多由紙・檀紙・
 多由子の紙・ヒキアヒセ・松皮紙・麻
 紙・スキカヘシ・宿紙・まけじの紙・
 源氏物語よりくる紙・待文を書き紙
 (天墨四ノ七一)
 支那の紙は毛邊・賽雪紙・黃確頁紙・澄

心堂紙・金粟藏經・宣德紙・鏡光紙・
綿料白紙・扇料白紙・大學紙・川連紙
・雪清膠(實錄三ノ一九)

支那より来たる五色の香紙產地(翁草一九四)
紙の徳・紙の故事、天然紙草木の葉の

代用(雅志一ノ二五九)

紙の起原(梅麈七五九)

支那・日本とその紙の始、渡返し(三者四四六五)

我邦製紙の始(煙霞三ノ五八三)

後漢の蔡倫造紙といふと前漢の時既に紙あり
といふ説(過庭二ノ二七)

日本使者興能、其紙以前前而而澤澤橋茶
中中ノ三九

支那人のいふ日本に蘭紙といふ何か鳥の子
紙・綿料紙(茗話下ノ二)

我邦製紙の始煙霞并并且且渡返し

の始、宿紙、水雲紙、薄墨(它山一ノ八)
紙世より前、本草本草に載り(兼穂一上ノ七三)

古紙、延暦此の紙、古紙の寸法、半紙（好小下
六三〇）

詔書・勅書に用ひし料紙（北外四ノ四五〇）
宮中の反古紙と液直して口直紫の用紙の寸
（遠碧下ノ三ノ四九五）

古代用ひし紙、白麻紙、黄麻紙、越前
の鶏卵紙、陸奥紙（實聲一ノ四）
宿紙・檀紙・修善寺紙・五野紙は平人
の用ひしもの（近風五ノ一八五）

延暦大同の紙は紙世に常用せられたる（良
山二ノ三六）

古紙甚少ありしより白紙拂底之間所用友
古也（三者四ノ四五六）

白紙の拂底、宿紙、熟紙、液直し（南遺志）
白紙の拂底は何故か、白紙は存紙か、厚
紙と為り（南遺祥七一六）

所波より土佐紙を撰送するは所波候止ありし
話（新著一六ノ四一一）

甲斐産鼻紙の専賣(文政三二五)
相印りふ内各地紙の壹羅井止觸(月
半七ノ三七二)

日本製支那製紙の品質比較(良山二二七)
各種紙一帖の枚數(標海一四ノ四七二)

明和頃半紙の價(金堂本七三一)
紙と濫費する者と戒む、製紙の勞大なり
(玲瓏二ノ六二五)

うす墨、水雲紙、宿紙(遠碧下ノ三ノ四九六)

海藻を漉入しる紙の産地(譚海四ノ二二三)

雲紙・染紙(遠碧下ノ三ノ四九五)(嘉良四ノ二九六)

穀紙・麻紙・秦皮紙・紙屋紙・斐薄紙・檀紙

(市標三ノ一七)

場の宿紙、漆紙(一舉二ノ四四一)

宿紙(嘉良三ノ二三一)

宿紙 山口宣子やく紙(梅村人ノ五七)

宿紙と熟紙(仙臺一ノ二六九)

宿紙と還魂紙、熟紙、古の杉原紙、奉書

(好山下ノ六三一)

宿紙、又、熟紙は濃返一ノリ(草序一ノ三五七)

宿紙、又は水雲紙(遠碧下ノ三、四九五)

宿紙、又は紙唐紙、美濃紙(錦所二ノ一八三)

熟紙と生紙、其用途、中井竹山書を作す。

必ず熟紙も用中(良山二ノ三五)

濃返一の始、宿紙、水雲紙、唐紙(煙霞三ノ五三)

京都紙濃紙、免許札拜領者、唐の紙、扇

の地紙、他國より紙の輸入も禁す、禁中

へ米及紙の納入、紙濃法(嘉良一ノ一五〇)

水戸光園奉書書の濃返一ノ上と唐紙とを法

(三者後ノ四ノ五六二)

日今と唐紙と濃紙と、其品質(宝丁

五ノ一三)

和製唐紙(向同上ノ二二〇)

和製唐紙、ふすま一枚張の岩右唐紙の

製出と其数明(世姿四六四)

玉川邊より製す、和唐紙、紅濃紙の題

(金堂木七四四)

薩摩藩の唐紙 (梅窗一ノ二)

毛邊紙 (夕ウシ、竹紙) の製法 (中陵三ノ四)

唐紙を割けぬえりにする法 (禪通三ノ四)

檀紙、又隆興紙 (一舉三ノ四)

檀紙はミクク紙引り (翁草三八ノ四)

檀紙、隆興紙、おゆみの紙 (夏山四ノ七)

檀紙の古今、宿紙、各色紙 (中陰リウチ

シモリ) 墨流し、下畫、焼画、染紙 (好督
五七〇)

澄心堂紙、今誤て燈心紙 (中陵二ノ二六七)

岩國及水戸の半紙 (禪通九ノ二七三)

奉書紙 (柳菴保ノ四〇二)

高麗の菊紙、美濃紙と書紙と書く (作

業三ノ一七)

淡紙、宿紙、罫紙 (夏山五ノ一〇一)

紙・紙造法・造紙植物図説 (文藝類考七)

紙 (大日本美術史六六)

紙 (多迹簿下)
紙 (米庵墨硯統三)
古紙古墨 (吾國地事廿)
古槌紙法 (シ)

紙 (宛委餘編一百七十卷、二十三丁少) (五雜俎十二卷、
十三丁少)
評紙・蜀牋・歙紙・澄心堂紙・西山觀音
紙・廣信紙・常山紙・英山紙・撫州・

紹興紙 (格古要論、文房論、卷九、七丁少)
紙說 (文房肆攷卷三、二十三丁少)
造古經紙法 (居家必用卷十、六十六丁少)
槌紙法・造五色牋法・肉紅牋・娥黃牋
粉青牋・淺雲牋・造牋上金花法・造
真青紙法・造油紙法 (クク、六十七丁少)

○陶磁器

陶器を大工とリ小（夫牛中々二三）

磁器とリ小名（塩尻二ノ二八）

日本陶窯の始（リリ三四）

瀬戸物、——各種（世談六九）（談正二九）

茶碗、秘色、柴窯、汝窯、哥窯、

官窯、——に年號を付くる事、龍泉窯、

古窯、景德鎮、——に釉をかける法、

窯変、建盞、水滴、油滴、南京焼、瀬

旬名器

戸物、後曰く俊慶、常陸帯と祖母懐（

磁器二ノ下ノ三〇ヨリ）

吳洲手（シニ下ノ三四）（桂林下ノ二）（卯花下三七）

陶磁器も吳洲とくふ（三月月ノ一五）

尾州の——（北尻四八、七七六、六八、一九五）

瀬戸物（南畝上ノ二三）（松茸八八、七、一〇六、三二）

瀬戸物の沿革（如蘭一二、二一）

瀬戸物の書と鎮信彫（室川四人）

後曰く焼、古瀬戸、大瀬戸、小瀬戸、掘出

し手、春慶、真中古物（海録一四、四〇五）

後曰く焼（世後七〇）（徳正三〇）（武徳四七）

賤機山の陶器（甲子五四、五二五）

急焼（菓葎一、一〇）

十錦（磁器二ノ下ノ三〇）

大食窓（シ、シ、二八）

やき付繪（シ、シ、三〇）

磁器をゆぐる用ある子（シ、シ、三〇）

磁器ノシニウの本字（梅日四ノ二九）

陶磁器の出来たる字の脱けり法(甲子四六)

二八三

柔陶の法(海録二〇、五五五)

唐津古陶譜(一後三九、三一)

唐土の陶磁器(屠龍二六)

高麗窯(煥述二ノ下、二五)

忘部と古の陶磁器(草唐四ノ四〇二)

鐘舎新刊屋敷地より堀出たる磁器片の

図(耽奇三七六)

奥州瓶岡山古陶器図(耽奇三五二)

文祿役の倭唐朝鮮人より日本に陶業

興る(嘉良三ノ二二六)

京都粟田口及清水の陶磁器、松風亭友

旭峰の製作品(羅旅中ノ二〇四)

古瀬戸、伊万里焼と柳本高門、井戸焼、

伊万里五郎大夫(禪海二ノ三七二)

錦手の瀬戸物流行(近尾一六、五八四)

イラボ焼(幸菴三一六)

五條陶工松田三右衛門へ唐人却用物ハ朝興
基ニ注文一件(事實堂根)裁別沙汰と
ナリ三右衛門お預(月半二四ノ二三)右
焼物没收(クニ白ノ三九)(翁草三六四九)
陶磁器の縁の缺けを平くする法(高
意下ノ一二)

唐津陶磁器譜(一話三九ノ三一)
伊万里焼は海内中一(娘遊二ノ下ノ二六)
忌部焼(杉筆六六ノ五七)

伊部陶器(春湊下ノ一五)

尾張焼(娘遊二ノ下ノ三)

乳山焼(世談七一)

七官青磁(海録一五ノ四八)

三田の青磁(娘遊二ノ下ノ三四)

瀬戸助焼(或俗四七)

瀬戸焼ハ尾州赤津及瀬戸の製陶、祖

母懷の土、青繪(塩尻三五ノ五六一)

玉水焼(娘遊二ノ下ノ二六)

萩焼とよ陶器 (媛遊二ノ下ノ三五) (世談七一)
(談正三四)

萩焼の茶碗 (桂林下ノ二二) (卯花下三一六)

肥前焼 (媛遊二ノ下ノ三七) (松筆九八ノ二九)

平戸焼 (松筆六二ノ六)

平戸焼と其匠頭 (甲子八八ノ三四九)

松本焼 (媛遊二ノ下ノ二五)

美濃焼 (ウック三五)

樂焼 御室焼 (ウック二六) (世談七一) (談正三三)

樂焼と樂焼師 (筆寸上ノ一三)

陶器や手継 (媛遊二ノ下ノ二〇) (塵塚六三)

ノ元祖 (親子二ノ六四)

ノの流行 (飛鳥九)

土器大小の名 (安隨三ノ二五)

古代の土器 (如蘭三六ノ一五)

古墳より掘出テ素焼の孰、行基焼 (海録

一八ノ五〇五)

洛北畑枝の土器荷 (雲錦二ノ二)

春日神社の土器 (葦葎一、二〇)

玉里村より出てる古土器 (護小四、四五)

陶工喜山のくす焼キビシヤウ流行 (近凡一、五)

八二)

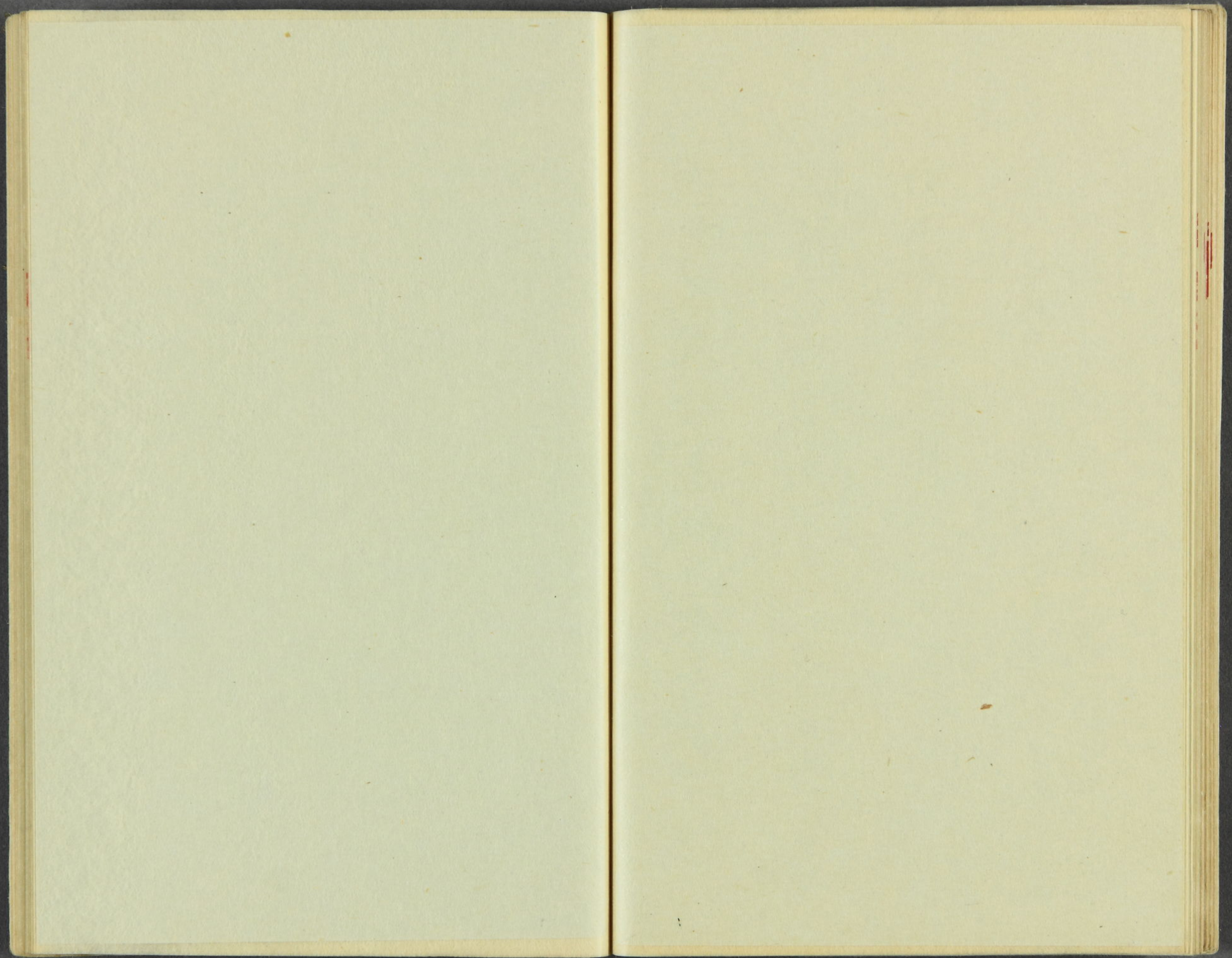
陶工道八の土瓶流行 (リリ)

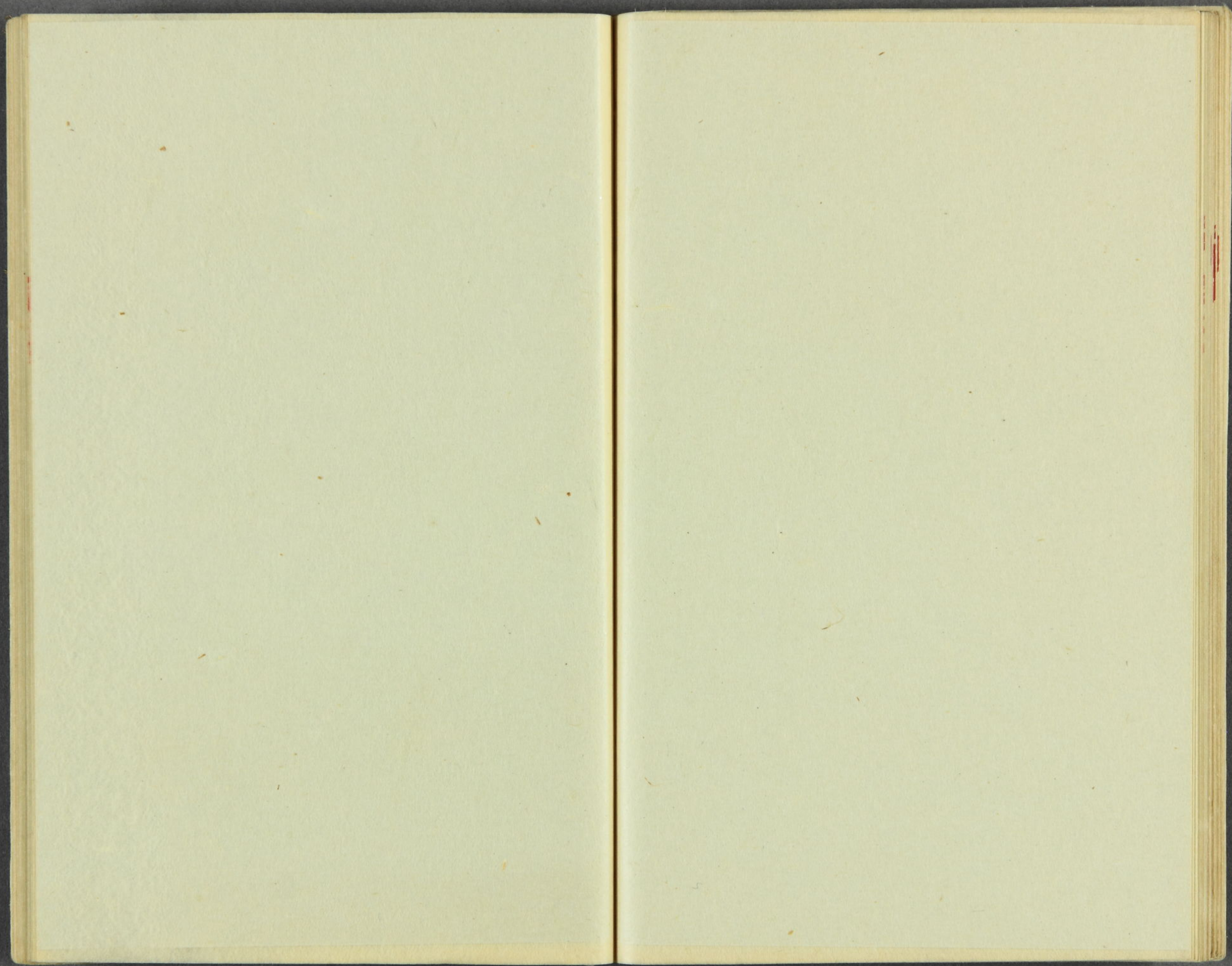
陶器 (五雜俎十卷、二十五丁) (宛委餘編一百七卷、

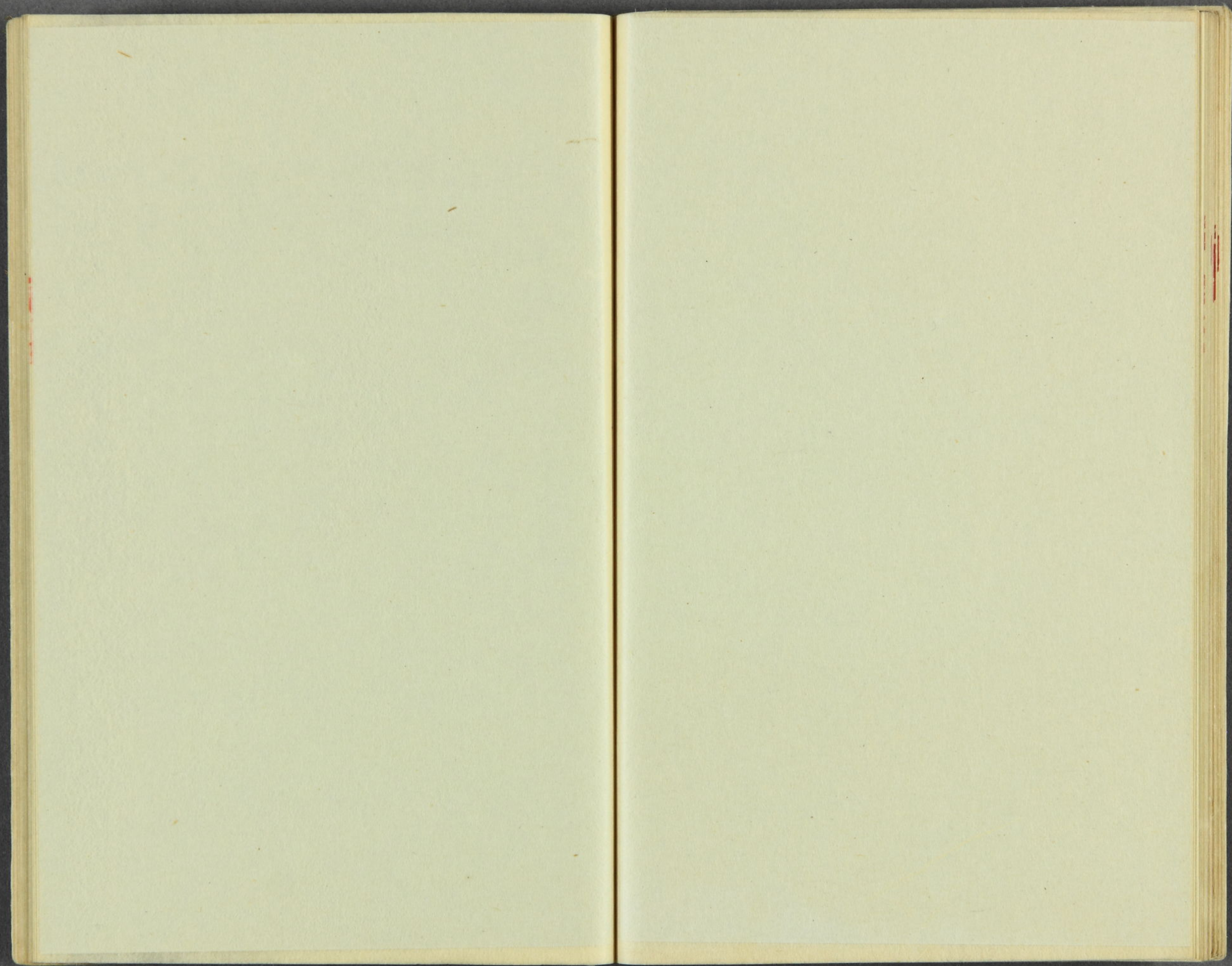
十四丁ウ)

古窯器論 (格古要論卷七、二十丁ウ)

古窯器攷 (文房肆考卷三、二十七丁ウ)







○鑛物 日本產地

石綿

武藏、兒玉、河内

滑石

〃、秩父、白鳥

雲母片石

〃、大里、末野

砂岩

〃、秩父、大淵

礫岩

〃、西多、五日市

花崗岩

〃、〃、日向和田

蛇紋石

〃、秩父、金崎

安山石

相模、足柄、吉濱

黃如

硅岩

上野、多野、魚尾

方鉛礦

下野、河内、佐下部

柘榴石

常陸、真壁、山尾

大理石

常陸、久慈

角閃石

安房、前原

凝灰岩

伊豆、加茂、手石

石灰岩

真壁

輝石

甲斐、西八代、上佐野

蛭石

東山梨、駒飼

金鑛

南巨戸、保

自然硫黃

信濃、諏訪、八ヶ嶽

磁鐵鑛

信濃、南佐久、小日向

長石

磐城、石川、外牧

白雲母

〃、〃、狸森

黑炭

〃、石城、磐城炭山

片麻岩

〃、石川、双星

石英

〃、〃、外牧

陶土

陸前、玉造、鳴子

粘板岩

〃、桃生、雄勝

○ 鷄冠石

石中、結晶、毛、北、山、嶽、湯、泉、噴、物、沈、澱、物、秋、田、仙、北、

閃亞鉛鑛

陸前、栗原、細倉

石膏

ク、加美、宮崎

琥珀

陸中、九戸、大川目 何処より出づ

孔雀石

羽後、北秋田、阿仁、荒川鑛山、其他銅山と稱する處に
葡萄状又土状と有りて出づ

輝銀鑛

ク、雄勝、院内

黃銅鑛

ク、北秋田、阿仁

水晶

美濃、惠那、苗木

錫石

ク、ク、ク

黃玉

ク、ク、ク 近江田の上、伊勢、員辨。石博村、三重郡、水沢村
美濃、惠比壽鑛山、常陸、本彦城、高取鑛山

方解石

ク、不破、赤坂

赤鐵鑛

ク、ク、ク

褐炭

尾張、愛知、長久手

粗面岩

三河、南設楽、宝来寺山

褐鐵鑛

ク、尾美、高師

石墨

越中、婦負、清水

蛋白石

越後、南蒲原、八田

螢石

能登、羽咋、宝達山

黃鐵鑛

出雲、神門、鷺峠

○辰砂
○瑪瑙

阿波、那賀、水井
根室、花咲、タラク島

○名物切

○大内切 美隆の北の方が几帳の切れ

○清水切 京都清水観音の巾着の切れ也

模杯梅のやうなやう

○金春切 古金練の部を山で織りたる中

り金よりアマ新あり

○權大夫切 古の地金の舞衣付きあり

○古金欄 皆千年以上の切れなり、何

れと厚ありて、漆をそのやうのやうに付
け、金糸より留めたるお故に白くもなる

事なり。大焼すれ。けいといや。花うさ
ぎ。富田切。あつらふる等。古金禰の
名おるなり

○印金 唐より織物のりきり程に出まじ
る時、綿より綿よせりし繪の上より金箔を押し
付けしを印金と云ふ。即ち印金織子
○廣東切 古金禰より古き物なり。山又
織りしものなり。○太子かんとも云ふ。上
宮太子の物なり。○鎌倉かんとも云ふ。古
南溪程昨の加む物の切れ。何れも古
金禰なり。價十倍成りし

○刀劍

○一條兼良が尺素往来ニ曰ク、遣刀・長刀及

月山初筆
名譽ト云フ

び太刀・腰刀は昔に在リては月山・天國・
雲同以後其の名を得たる鍛冶、數百人有

リと雖も、其の中に於いて信房古備前・舞草伊豫州、

行平・定秀・三條小鍛冶宗近、後鳥羽院

番鍛冶、御製作の者は菊を以て銘と為す。

國支

粟田口は藤林・國吉・國光・國綱等、宋
は國行・國俊等、此の外は一文字・千手
院・僧了戒・有計留・道後五・仲次郎。

○正宗應仁
証據
○盛高其
數ニ入ル名
刀ナルヲ知
ベシ

五郎入道正宗・備前三郎國宗・孫彦子四郎・文珠四郎並びに金剛兵衛等一代聞達
の者ニ候。云々

○後醍醐天皇より楠正成に賜はりたる短刀。
月山作なり。

○鑄之件

金 銀 赤銅 鉄 鋼 減金

焼付 四分一 唐鑄

埋忠妙射 京上作。象眼入 重治

同 七左衛門 京 象眼入

同 彦右衛門 京

一 忠次 京 細透の名人

一 貞家 伏見 銀象眼入 又貞翁象眼

あり 早乙女家貞ト別人か

明珍伝家

十中六本
の記あり

- 一 貞長 伏見 古同新
- 一 貞信 〃 〃
- 一 加賀守 大改
- 一 久兵衛 〃
- 一 鉄人 青木尉右衛門 江戸
- 一 大隅 〃
- 一 戸田彦右衛門 尾州
- 一 山吉兵衛 〃 田蘭新 為長信
- 一 定長 紀州 代有

- 一 正阿弥 會津
- 一 駿河 備前 代有
- 一 くのり 傳兵衛 長門
- 一 如いち 権之丞 〃
- 一 法安 唐崎
- 一 遠山又七 肥後
- 一 基五右衛門 香津
- 一 阿波鑑 〃 金象眼入多し
- 一 紀内 越前 〃 勢の形物多し

一 赤尾其乃内門 越前。世也又透し
 一同 古名内 ン
 一 金山 鑄 いづれも古
 一 漢南 鑄 象所入
 △ 古き鑄は赤豆色なり又鑄に上作下作有
 リ厚き鑄のみ一の一文字威がよし、後
 透しあり古き鑄の耳をすりて一文字に
 一なるもの有り古き鑄の耳にもく目あ
 出るものなり (萬室金書)

○ 装剣奇賞に云く、九州に房古と云ふ上
 手の鑄工あり、菊透殊に妙なり又尾
 剣に柳生鑄とて往日柳生某と云ふ剣
 術者の好みにて数十枚の鑄をきり、
 はせ是を向て力におうせてつるを、
 其破れ又(入北)に鍛へるものあり、
 右なるもの取えたる用ひしとらむ
 侍つると或士おくりて鑄をきり
 りず、ふれをぬめしれ、ゆゑ其名

かりしに弘くして競うてこれを知る
し今名を冠して専ら行る。上方より
よまじ。其のゆへに多くしきことあり

○前掲の愚次は山内原正次の師にして慶長前後
の名士なり。正次も細透に妙を得、後世是
に倣ふものを皆山内原譚と稱せり

○彫玉乘意。昔より一流を彫て名をうを得
し宗張・乘意・利軒・安款などあり
(装剣奇貴) 乘意、宗張彫りしと表
三の門人なり。装剣奇貴巻之三。八九丁
に詳しく傳を載す。肉合彫の元祖也

宣興壺製作者

供春

金砂寺僧の門人

歐正春

雅流

可分

董翰一名後谿

趙梁

玄錫

時朋

時大彬

大家
朋子

李茂林ク

李仲芳名家

陳魯生

陳光甫

邵文金

邵文銀

蔣伯芎

陳用卿

陳信卿

徐友泉名士衡

陳仲美天啓甲子春仲美

沈君用

邵蓋萬曆年間

周後谿ク

邵二孫ク

陳俊卿望大彬門人

周季山

陳和之

陳挺生

承雲從

沈君盛

以上明末

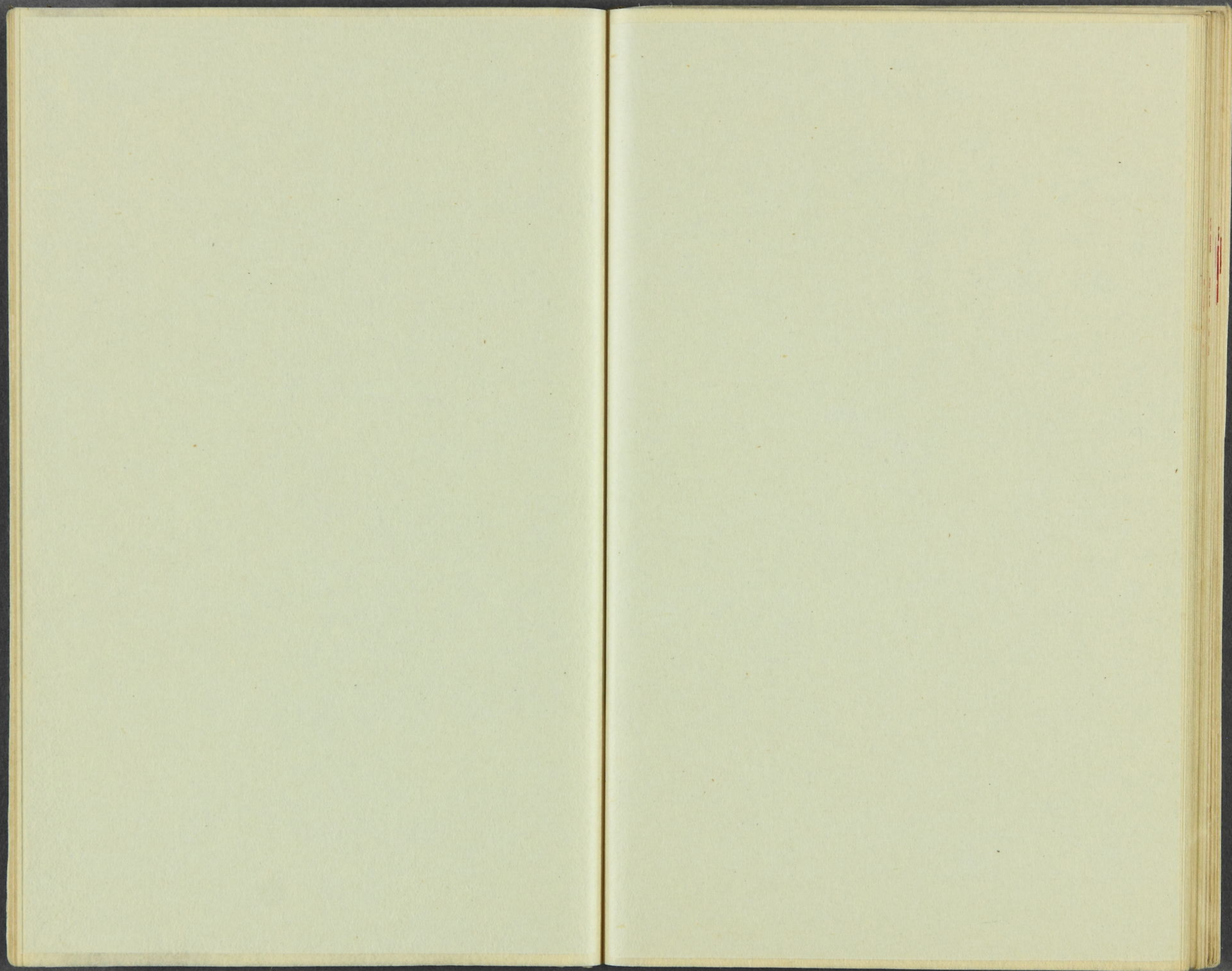
惠孟臣 清初

留冊 清

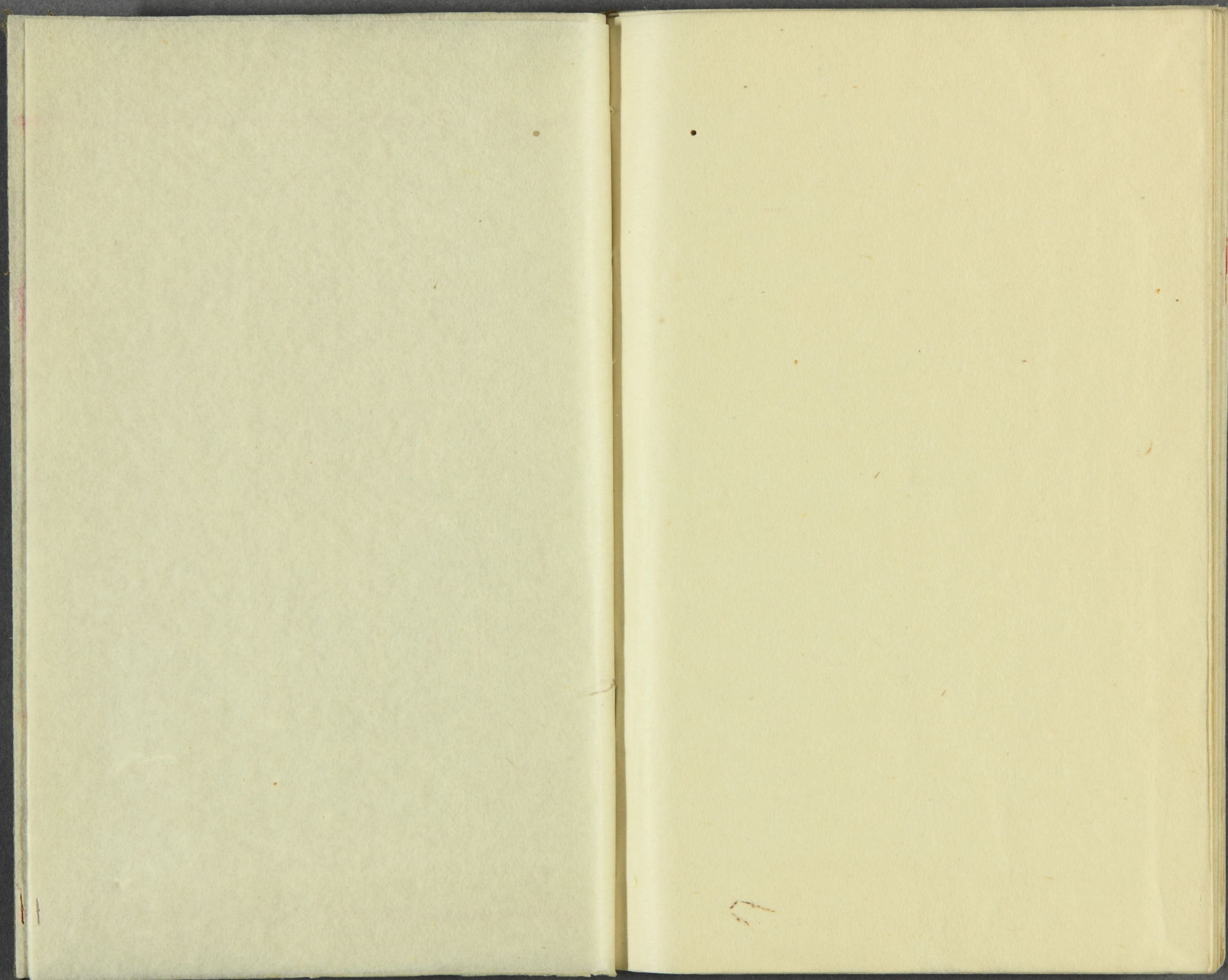
陳曼生

子治 少

許文龍 少



以下
18 丁
白紙



17

